

〔 編集後記 〕

今は3月の末で丁度入学試験の時期ですが、この頃は大学構内に春の季節の訪れを初めて告げる使者として紅梅、白梅が美しく咲き揃っています。梅の花が散ると、次いで桃の花、そして最後は桜の花の行列と千葉大学医学部のキャンパスは一年中で最も美しい季節を迎えます。

我々は仕事柄、学会出張とか、稀には講演旅行、そしてその他の諸々の理由によって日本全国をあらゆる所を訪れることが多くあります。一県に一医学部が存在しているこの頃、偶然にそれぞれの土地で医学部を目に致します。とくに私は、他の土地を訪ねたら、まずジョギングをしながら知らない土地を走って楽しむという病気をもっているもので何となく訪ね当たる機会が多いのかも知れません。

最近つくづく感じることは、千葉大学医学部は“いいな”“幸せだな”ということです。何が幸せか、少なくとも私が知る限り我々のキャンパス以上に豊かな自然環境に恵まれている医学部はないと思うからです。勿論北海道大学などは、学内にかの有名なポプラ並木を始めとして、とてつもなく広くそして美しいキャンパスを持っていますが、それは大学全体としてのものであって医学部

とその周辺は何の変哲もありません。我々のキャンパスのこの美しい緑にとんだ環境は、私が在学していた昭和36年代と少しも変わらないだけでなく、その当時に比べて、木々は一段と大きく成長してきたようにもみえるし、キャンパスもより良く整備され以前にも増して豊かになったように感じられます。ノスタルジーかも知れませんが、昔ながらの重厚な医学部の建物も華を添えていることは確かでしょう。

自然は年を経るに従ってその美しさを増しますが、悲しいかな近年の貧相な建物は反対に年月と共にその醜さを示し出します。とくに病院のような機能性と清潔性を最重要視する分野では、常に新しい建物を模索し求めるいわば当然のことです。このようなときに私にとっての最大の関心事は、どのようにしてこの美しい自然環境を保持しながら新しい事を造り得るかにあります。広い土地があるからそれを潰せばいいというのは余りに貧相な発想でしょう。一度破壊した環境を元に戻すことは至難の技です。Scrap & buildの原則を是非基本的な考えとし、この美しい環境を次代に継承することが我々の義務でしょう。

(編集委員 中島 伸之)

— 掲 示 板 —

本号より、三浦義彰名誉教授の連載「20世紀のわが同時代人」がスタートします。これは、平成9年度までの「台所の生化学」が好評につき、第2弾として企画されたものです。御意見・御感想等ございましたら、編集委員長の野田まで御連絡ください。